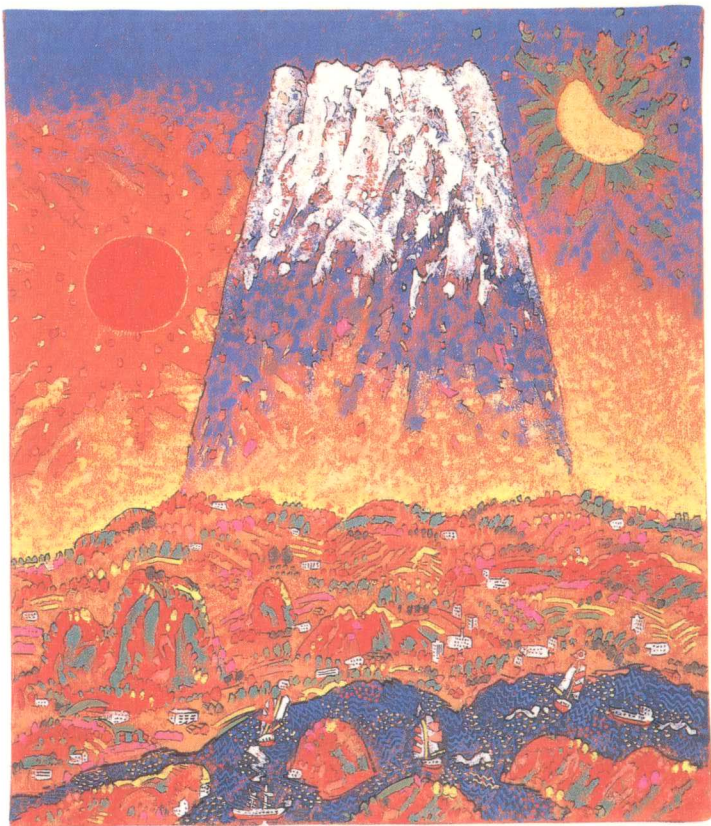


# 山河ありき

明治の武人宰相  
桂太郎の人生

古川 薫



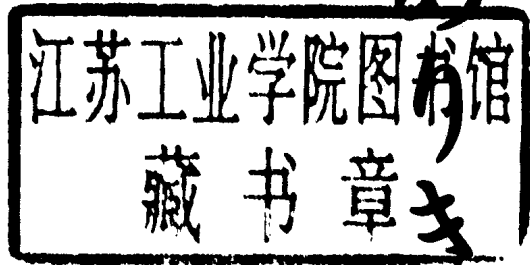
文藝春秋

山河あき

明治の武人宰相  
桂太郎の人生

古川薫

文藝春秋



## 著者略歴

1925年、山口県下関市に生れる。山口大学卒業。山口新聞編集局長を経て、文筆生活に入る。1991年、「漂泊者のアリア」で第104回直木賞を受賞する。著書に「天辺の椅子」「新・米欧回覧」「夢の道」「覇道の驚 毛利元就」「ザビエルの謎」「剣と法典」「軍神」「毛利一族」などがある。

さん が  
山河ありき 明治の武人宰相桂太郎の人生

---

1999年10月10日 第1刷

著者 ふるかわ かおる 古川 薫  
発行者 和田 宏  
発行所 蟹 文藝春秋  
東京都千代田区紀尾井町 3-23  
郵便番号 102-8008  
電話 (03) 3265-1211  
本文印刷 理想社  
付物印刷 大日本印刷  
製本 矢嶋製本

---

万一、落丁・乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。  
小社営業部宛お送り下さい。

©Kaoru Furukawa 1999 Printed in Japan  
ISBN4-16-318710-3

山河ありき／目次

## 第一章 藍場川のほとり

桂家の人々／萩城下川島／「地球を見よ」／  
横笛と軍艦

7

## 第二章 風雲

黒船にいどむ／初陣／異国艦隊襲来／高杉晋  
作の決起／兵学塾教官大村益次郎／四境の戦  
い／臨機応変のストラトギ―

25

## 第三章 黎明を走る

殺人／戊辰戦争／兵学寮脱出／ドイツ留学／  
政変／陸軍卿山県有朋／佐賀の乱／情報将校  
／モルトケ將軍

50

## 第四章 將軍たちの争い

竹橋事件／参謀本部／児玉源太郎／反撃／お  
雇い軍人メッケル

99

## 第五章 内憂外患

北辺の守り／陸軍大臣の椅子／兵家の面目／  
義侠論／出征／三国干渉／瀕死の秋／台湾総  
督の椅子

115

## 第六章 台湾協会学校

乃木希典の怒り／開拓者の気魂／吉田松陰の遺志

147

## 第七章 戦う宰相

東洋の蜜／義和団事件／桂太郎内閣の誕生／対露戦近し／前夜／開戦／挙国一致の大号令／首相の介入

159

## 第八章 日露の激突

旅順攻撃／二〇三高地／クロバトキンの攻勢／死闘／奉天大会戦／政戦両略／日本海海戦／戦いすんで

194

## 第九章 青山動かず

お鯉という女人／桂園時代／伊藤博文暗殺／大逆事件／済生会／最後の旅／新党結成／大正政変／若林の土に眠る

227

## 拾遺——あとがきに代えて

274

A 装  
D 画  
坂 絹  
田 合  
政 幸  
則 二

# 山河ありき

明治の武人宰相桂太郎の人生





## 第一章 藍場川のほとり

### 桂家の人々

その日の午後、寿熊はどろんこになって、外から帰ってきた。

石合戦に参加すると告げて家を出ていったので、衣服を汚したり額に瘤をつくって帰るのはいつものことだが、斬り裂かれた着物の袖が鮮血に染まるなどは、やはりただごとではない。腕に刀傷を負っているようだった。

「どうした」

母親の喜代子は、冷静をよそおう低い声で、小さな仁王のように足をふんばり玄関先に立っている寿熊にたずねた。

「喧嘩をいたしました」

「その刀はだれのものじゃ」

寿熊が肩にかついでいる脇差をゆびさす。石合戦に刀は携行しないはずである。

「田野村の健介の刀であります。これを抜いて斬りつけてきたので、奪ってやりました」

「傷の手当てをいたしましょう。早く奥へ入りなされ」

喜代子は門内の植え込みのあたりに素早く目を走らせた。追ってくる者がいないかを確認め

たのである。人影はなかった。

城下の子供たちは、<sup>たぐひ</sup>肩あげや付近の川で泳ぐなど穏やかに遊んでいるが、たまには石合戦といった危険なこともやる。町ごとに集団をくんで、互いに石を投げ合い、最後には取っ組み合いで勝負をつける。

寿熊はいっぱうの頭分、つまりはガキ大将のひとりだ。土分や町家の子供もまじるなかでは、上士の桂家の跡取り息子の寿熊が取りまとの地位に推されるのは、封建社会のしきたりが子供の世界にも持ち込まれているのだが、それだけではあるまい。

寿熊は小柄ながら<sup>りよりよく</sup>膂力にはすぐれていた。近所の七歳の子供たちにくらべて背は低いが、頭蓋の鉢は大きく肩幅も張っているのは、父与一右衛門ゆずりの体軀といってよい。乱暴な遊びはしているが、藩校や私塾での成績はよく、藩主から与えられた褒賞の白扇を持って帰ることもしばしばだった。

「泳ぎに行きます。その刀はだれがきても渡さないでください」  
手当てもほどほどに、寿熊は日盛りの外に飛び出していった。

ほどなく田野村家の使いがあらわれ、

「私方の子供が貴家に刀を忘れた由でございますので、受け取りにまいりました」

と、言う。その子は奪われたことをかくし、家僕に命じて取り返そうとする魂胆とみて、喜代子は無然とした。

「寿熊が持ち帰った刀は、わたくしが預かっておりますが、これは当家に忘れられたものではございませんぬ」

「では寿熊殿が持ち帰られたその刀をお返し願います」

「健介殿は組み打ちに負けた腹いせに、帰途待ち伏せて斬りつけたそうではありませぬか。寿

熊はだれがきても渡すなと言いき、出ていきましたので、わたくしが勝手にお返しすることはできません」

凜とした喜代子の態度に氣圧けおされて、使いの者はすぐ引き揚げて行く。やがてこんどは健介の父清三郎がやってきて、慇懃いんきんに頭をさげた。田野村家は桂家より家格の高い五百石取りの藩士である。

「忘れたとは豚児の虚言とわかりました。甚だ不都合の振る舞いあり、貴家の令息に刀を奪われたことを白状いたしました。深くお詫び申しあげます。当方にては世の聞こえも悪く、困惑しております。これは内々のこととして、なにとぞお返しねがえませんか」

「さようでございましたか。子供とて刀を抜いて人に斬りつけるなどは、決してあるべきではございません。再びかかることのなきよう戒められますならば、お返しいたします」

清三郎はわが子の刀を受け取り、ほうほうのていで帰っていった。

桂寿熊の母喜代子は、付近の赤川家・江木家の両夫人とともに「川島の三勇女」と評判される気丈な女性である。その人となり、たしかに尋常ではない。

萩藩士中谷孝右衛門の娘で、十七歳のとき桂与一右衛門のもとに嫁ぎ、二男二女を生んでいる。丈三尺四寸の着物をきたというから、背はいちじるしく低い。色白で額せまく、二重瞼の眼はくぼんで細いが、瞳にただならぬ光を帯びている。鼻筋高く、歯並びよく、口元引き締まり、顴骨かんこつ秀でて、顎は少しく張り……といった風貌の持ち主だ。

文芸の才があつて和歌をよくしたが、家政にもはげんで貧しい桂家の財政をけなげに切り盛りした。織物を得意とし裁縫もたくみで、子供たちの衣類はもちろん与一右衛門の紋付も彼女が織った黒木綿であつらえた。穏やかな与一右衛門とちがって、寿熊の激しい気性は母親に似たのであろう。

そのころ藩校明倫館では「寄せ」という剣術大会が四季催され、城下から見物客が集まった。一人で十人、時には二十人という敵を相手にする野試合である。寿熊らはそれを真似て木剣をふるって暴れまわった。川島の農民末松の子権吉が仲間にくわり、熱中して農作業の手伝いをしなくなったので、末松は権吉をひどく折檻した。

権吉からそのことを聞いて憤激した寿熊は、数人をさそって末松方の前に積んである藁に火を放ち、家を焼き払おうとしたのである。大事にはいたらなかったが、激怒した末松は寿熊を捕らえて納屋に閉じ込めた。このときは喜代子が懸命に詫言を入れて身柄を引き取るということもあった。

寿熊の父与一右衛門は、背が低く頭が大きい。獅子鼻で、眉と目のあいだが並外れて広い異相の上に、肥満体で腹部は便々として布袋のように張り出している。大小の柄を前方に長く突き出し、歩くにも悠揚せまらずといった姿勢で、大人長者の風格をそなえていた。

人と争うこともなく、举措謹厳にして規律を重んじ、家庭にあっても常に正座して膝をくずさなかったが、妻や子供たちを大声で叱ることのない温厚篤実な人柄だった。

酒量は相当にイケたほうで、晩酌のとき気がむくと家の者を集めて喜多流の謡曲を聞かせた。陶然として唸りはじめると深夜にまでおよぶので、それだけが家族や使用人にとって苦痛のタネであった。

型破りの両親をもつ桂家の長男寿熊、のちの日露戦争時、軍人宰相として難局を担当した桂太郎である。

寿熊はその形質を父母から享けついで。短軀だが頭が大きく、高い鼻は横に張り、耳たぶの肉づきが発達して「大黒」とよばれたりもした。少年時代の相貌は、むしろそのまま成人してからのものであったし、人は「巨頭公」とあだ名した。陸軍次官のころから次第に肥満して、か

つての父親のように腹部が膨張し、体重八十キロを超えるようになった。

父に似たのは体型ばかりでなく、そのころから温厚な人柄に一変したので、人は彼のことを「ニコボン」などと称した。政敵に対してもニコツと笑ってボンと肩をたたく仕種を表現したのだが、そこにはいくぶんの揶揄をこめているものの、独特の親和力に対する人物像への親しみもこもっている。

とにかく寿熊とよばれたころの彼は、筋肉ひきしまり、聡明な面立ちの、そして母親ゆずりの気丈な少年として、長州藩宗家の城下で多感な日々をすごしたのである。

## 萩城下川島

中国山地から流れくだる阿武川<sup>あぶ</sup>は、日本海にそそぐ直前、橋本川と松本川に分れ、その二本の川でできた三角洲<sup>デルタ</sup>の上に、萩藩の城下町は載っている。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原役で西軍についた毛利氏は、中国八カ国支配の座を追われ、広島城を捨てて、本州さいはての萩に新しい本拠を定めた。

もともとは瀬戸内海航路につながる山陽道の要衝三田尻<sup>みたじり</sup>（防府市）に築城したかったのだが、幕府はそれを許さなかった。「萩は引き込み過ぎたところ」と転落の悲哀と不満をもらしながら、いらい二世紀半にわたり、毛利氏は三十六万九千石の周防・長門二国に割拠するのである。

城は海を背にした指月山<sup>しづき</sup>のふもとに築かれた。その堀内に高級家臣が屋敷をかまえ、家臣団の武家屋敷町と商家の町筋が、南にむかって扇形にひろがる城下を埋め、最盛期の人口は十万人を超えた。

デルタ地帯の南端、つまり阿武川が分岐するあたりに突き出す一帯は川島とよばれた。二つの川にはさまれて、島とも思われる雰囲気からの地名である。いかにも都心から疎外されたかのような地尻で、住人の多くは足軽・中間<sup>ちゅうげん</sup>だったが、まれに上士の屋敷も混在した。

城下町の喧騒から遠のいた川島のさびれた風景に、わずかないろどりを添えているのは藍場<sup>あいば</sup>川である。幅二メートルばかりのこの川は、川島から橋本町、江向<sup>えむかひ</sup>を流れて平安古<sup>ひやうこ</sup>まで通ずる細く長い水路だ。江向の川端に藍場（染物場）があったことからの称だが、阿武川の水を引く灌漑用水路だったのをひろげて、阿武川と萩城の外堀をつなぐ小さな運河として利用しはじめたのは、延享四年（一七四七）のことである。

積荷の川舟が通れるように、藍場川にかかる石橋は両岸に差し出した積み石の上に、厚一枚石をかけ渡して持ち上げたかたちにしてあり、両岸には古い屋敷が並んでいる。今も阿武川から流れこむ水を、屋内に引いて利用している家があり、江戸時代からの生活情緒をそのままに伝える川沿いの町はしんと静まりかえって、人の姿を見ることがも少ない。

緑を映した川面に二本差しの影を落としながら歩いてくる若侍とでも出くわしそうな美しく古びた藍場川のとおりで、もし出会うとすれば、それはこの物語の主人公・桂太郎であろう。

阿武川の樋の口から約百メートルくだった藍場川にかかる石橋の下では、錦鯉が浅い清流を泳いでいる。そのそばに「桂太郎旧宅」と彫った石柱が立ち、生い茂る樹木の葉を透かした明るみのなかに平屋建ての瓦屋根が見える。一千平方メートル余の敷地内には簡素な庭が築かれて、川の水を引いた小さな池があり、質素な上士の生活の名残りとどめている。

寿熊とよばれた太郎の少年時代、石橋を渡ると黒塗りの冠木門<sup>かぶきもん</sup>があり、当時の屋根は茅葺<sup>かやぶき</sup>きだった。東側に竹垣を植えた庭の大半は自給のための野菜畑として使っていた。家の間取りは

玄関三畳、次の間六畳、座敷十畳、居間八畳、次の間六畳、控えの間二室、台所、下敷など計八室、ほかに別棟の長屋には先々代から仕えていた従僕藤山幾右衛門が住んでいた。

嘉永四年（一八五二）の萩藩分限帳には、「桂与一右衛門／百式拾六石三斗五升六合」と記載されている。与一右衛門は萩藩土石部甚右衛門の次男として文化九年（一八一二）、城下の平安古に生まれた。同じ町の桂家の養子となり、天保四年（一八三三）に家督を相続した。祐筆・大検役・海防用掛・船木代官などを歴任している。

弘化四年（一八四七）十一月二十八日、太郎は与一右衛門、喜代子の長子として生まれた。幼名を寿熊といった。三歳のとき桂家は平安古から約二キロの川島樋の口に移転した。少年時代は、藍場川のそばですごしたのである。

萩藩を宗家として、長府・清末・徳山・岩国の支藩を領内に配置し、本城をおいた長門国にちなんで、長州藩あるいは長藩と総称した。

嘉永年間における萩藩の家臣団構成はどうなっているか。煩雑を避けるために端数を切り捨てた数字でしめすと総計五千六百人、このうち諸士雇・足輕以下を除いて、三十石以上九十九石までの藩士は二千人、百石以上が六百人である。

五十石以上の藩士で大組士または八組士とよばれる人々が旗本にあたる身分で、千四百人いた。このうち百石以上の大組士は五百七十人、これが藩士の中樞を占める上級武士（上士）だ。したがって百二十六石の桂家は、萩藩の上士であったことになる。

しかし上士とは名ばかりで、家計は文字通り火の車というのが実情だった。萩藩は「八万貫の大敵」とよぶ負債をかかえていたのだ。銀八万貫はおそよ百三十万両、藩年間収入の二十倍にもあたる膨大な借金である。

このため天保二年（一八三一）の秋には、過酷な年貢取り立てに泣く農民十三万人が参加す



る大一揆が発生する事態となった。十三代萩藩主毛利慶親（のち敬親）による藩政改革は、この一揆を経て本格化したのである。

貧窮に苦しんだのは、農民ばかりではなかった。「御馳走米」（台所の苦しい藩主に、ご馳走を食べてもらうの意）と称する俸禄天引きで、藩士に支給される禄米は極端に減り、三物成（三分の一支給）なら歎声があがったというほどの惨めなありさまだった。

吉田松陰の実家杉家は二十六石だったので、半土半農の生活にあえていた。杉家四代七兵衛のころは川島に住んでいたが、文化十年（一八一三）三月、樋の口から出火、四百余戸を焼く大火があった。

家財道具など一切を失い、焼け出された杉家は、城下の東郊松本村に移り、転々と借家住まいの十数年をすごし、七代百合之助（松陰の父）のときようやく人里はなれた団子岩に居を定めた。桂家が平安古から川島に転居したのは、それから三十六年後のことで、放置された大火の跡の空き地に簡素な屋敷を建てたということだろう。

桂家の遠祖桂広澄は、毛利氏の相大江広元から十代の孫である。広澄は毛利弘元から元就に至る四代につかえ、一門出身の重臣として戦場を馳せ、勲功をあらわした。

広澄には四人の男子があり、第一子の元澄は元就の側近としてはたらいいた。元就が厳島で陶晴賢を討ったときは、安芸桜尾城主として重要な戦略に参画、元就の覇業を助けた。

元就の死後、輝元の代になって、天下分け目の関ヶ原役に遭遇する。毛利氏は西軍に属したため、中国八カ国支配の座を追われ、周防・長門二国に閉じこめられた。百十二万石から三十六万九千石の外様大名に転落した主に従った家臣団とともに桂家の人々も禄を減らして防長に入り、ひきつづき毛利氏につかえた。